様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月 １５ 日現在

機関番号：３２６８２
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2020～2023
課題番号：２０Ｋ００１３７

研究課題名（和文）ヴァイマル期ドイツにおける総合舞台芸術の協働演出と身体表現のポピュラリティ

研究課題名（英文）Collaborative production of performing arts in Weimar Germany and the popularity of body expression

研究代表者
大林　のり子（Obayashi, Noriko）

明治大学・文学部・専任教授

研究者番号：００３３５３２４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,000,000円

研究成果の概要（和文）：ヴァイマル期（1919年ー1933年）のドイツ語圏における総合舞台芸術を、身体表現「パントマイム」「無言劇」「舞踊」「ジェスチャー」の側面から、そのユニバーサルな表現の模索、ポピュラリティの獲得への道筋を調査を通して検証し、歴史的な意義を再考した。具体的には、1920ー30年代のベルリンにおける大劇場運営と、そこでの上演作品の変化、ギリシャ悲劇や古典作品からオペレッタ、レビューまで、その群衆演出の内実について検討し、また国際的に通用する新たな「パントマイム」の創造を目指す20年代の活動の事態を当時の歴史的資料を調査・その内容について明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究は、20世紀前半の総合舞台芸術が、従来の演劇史・演劇学においては「演出家の誕生」あるいは「劇場の近代化と新たな祝祭の誕生」、そして「全体主義」との関連において、議論されてきた。しかし、その統合という性質ゆえに、製作過程にみられる協働者の匿名性が高まり、協働する芸術家の個々の取り組みや個性を、作品全体への影響力を把握することが困難になる。たとえば協働者たちは「固有の芸術家」として見なされずに置かれ、かつ、その協働者たちの多くが、ナチス台頭により国外で映画やショービジネスに場を移している。その実体を追い、協働者の活動を詳細に調査・分析することで歴史を捉え直す試みである。

研究成果の概要（英文）：This study examines the search for universal expression and the path to popularity of comprehensive performing arts in the Germany during the Weimar period (1919-1933) from the perspectives of physical expressions such as wordlessdrama(pantomime), dance, and gestures, and reconsiders their historical significance. Specifically, it examines the management of large theaters in Berlin in the 1920s and 1930s, the changes in the works performed there, and the content of the crowd performances, from classical drama like Greek tragedy to operetta or revues, and also examines historical materials from the time to clarify the activities in the 1920s that aimed to create a new "pantomime" that could be used internationally.

研究分野：演劇学・演劇史

キーワード：ポピュラリティ　ヴァイマル期　総合舞台芸術　協働　演出

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１（共通）

１．研究開始当初の背景

本研究は、ヴァイマル期（1919 年～1933 年）のドイツ語圏における総合舞台芸術について、身体表現「パントマイム」「無言劇」「舞踊」「ジェスチャー」の側面から、そのユニバーサルな表現の模索、あるいはポピュラリティの獲得への道筋を検証し、その歴史的な意義を再考するとともに、現代の舞台芸術との接点を見いだすことを目標とした。

本研究で主に取り組んだ領域、20 世紀前半の総合舞台芸術は、従来の演劇史・演劇学においては「演出家の誕生」あるいは「劇場の近代化と新たな祝祭の誕生」、そして「全体主義」との関連において、それぞれに議論や研究が進められてきた。しかしながら、総合舞台芸術の製作過程における複数の協働者の関与と匿名性、その統合という性質ゆえに、協働する芸術家の個々の取り組みや個性と、その作品全体への影響力を把握することが容易ではない。ゆえに言語や記録として比較的追跡しやすい劇作や演出、つまり劇作家や演出家の仕事から、総合舞台芸術の作品概要をつかみ、分析することが第一の方法となっている。

特に、本研究において調査を進めた無言劇やバレエパントマイムなど、非言語的身体表現に重点を置いた総合舞台芸術は、その中間的な性質、つまり言語や会話に期することのできる演劇と、身体表現に重点化した舞踊のいずれにも分類されにくく、かつ協働者の匿名性が強いことで、その実践や成果を具体的に把握し、さらに影響力について検証することは未だあまり十分ではないと考えた。当然ながら、この対象を扱うためには、超領域的な観点も要求される。

つまり調査が進んでこなかった要因は次のような点にある。まず、総合舞台芸術の協働者たちは、舞台特有の有機的な表現として融合されることで「固有の芸術家」として見なされずに置かれてきたこと。かつ、従来の当時のドイツ語圏に仕事を得た協働者たちの多くが、ナチス台頭とともに国外への亡命を余儀なくされ、舞台芸術から映画、あるいは商業的なイベントに活躍の場を移していったことで、その実態が見えにくくなっている。例えばドイツ語圏では近代化とともにモダンダンスが台頭し、その舞踊学研究は進んできたといえるが、当時の総合舞台芸術製作に関わった振付家の多くは、協働者として作品製作に知恵と才能を提供しながらも、その影響力について明確にされていないように思われた。

２．研究の目的

本研究の目的は、現代の娯楽的な舞台芸術に見られる「ポピュラリティ」の側面に迫るために、当時のドイツ語圏における身体表現「パントマイム」「無言劇」「舞踊」「ジェスチャー」に関する主要な議論や研究の広がりを整理しながら、ベルリン・グローセスシャウシュピールハウスや同時期の総合舞台芸術に関与した当時の協働者たち（振付家と台本作家、舞台美術家）について調査研究を進め、彼らの 1930 年代以後の活動の広がりについても追跡する。そこから現代のエンターテイメントに通底する「ポピュラリティ」と「ユニバーサリティ」について明らかにすること、そして他方で、統合的芸術表現が有する大衆扇動やプロパガンダの特質についても検証していきたいと考えた。

また、ヴァイマル期のドイツ語圏に製作された総合舞台芸術において、身体表現「パントマイム」「無言劇」「舞踊」「ジェスチャー」の果たした役割を、あらためて捉え直し、その意味と役割とはなんであったかを問い直す。先にも述べたとおり、そこに舞台芸術における「モダニズム」と「ポピュリティ」への思考、そして「ユニバーサリティ」の模索が、背景としてあったことは確かである。その点をより重層的に把握し明らかにするために、これまで匿名性によって見落とされてきた総合舞台芸術の振付家についての活動を追い、総合舞台芸術に関する議論に新たな光を当てていくことを目指す。

さらには、演劇史および演劇学が学問的に推進してきた劇場や舞台に特有の表現を分析の対象するシアトリカリティに関する議論を、さらに推し進めることも視野に入れていきたい。いわゆる文学的側面からの演劇研究に留まらず、上演分析や劇場を取り巻く社会との連関も含めた場の研究として、総合舞台芸術における身体表現が舞台上または劇場の内部と外部に引き起こされる現象を分析する。この研究は必然的に超領域的なものになる予定であるが、それはとくにヴァイマル期、演劇と映画が近接し、非言語的な身体表現に関しては、互いの影響関係などもさまざまな形で現れていく点にも関わっている。この時期、演劇人によって模索された「新しい舞台芸術」が、超ジャンル的に複雑に混ぜ合わされたものであったことは明らかで、おそらくそれは今日の舞台芸術にも継承されている事象でもある。その点でも、身体表現「パントマイム」「無言劇」「舞踊」「ジェスチャー」についての総合舞台芸術における役割を再考していくことは、同時期の総合的な上演芸術を横断的に分析する可能性を示唆するものとしていきたい。

３．研究の方法

本研究で取り組もうとするのは、特にヴァイマル期のベルリンおよびザルツブルクにて製作され、ドイツ語圏に留まらず英米圏でも上演された舞台作品である。総合舞台芸術の中でも、オペラやドラマ中心の演劇ではなく、「パントマイム」「無言劇」として非言語的表現に重点が置かれた作品における協働演出について、視覚的な表現としての身体表現や衣装美術の領域に関する追跡調査および分析を行う。

具体的な研究の方法は、3 つの観点から「無言劇」「バレエパントマイム」の当時の意義や影響について検視していくものとした。

① 演技と舞踊の中間点としての非言語表現の発展を検証する。

特に、無言劇「奇蹟」で狂言回し「吟遊詩人」の役を務めた二人の俳優、マックス・パレンベルク(1877-1934)と、エルンスト・マトレイ(1891-1978)に関する調査研究を進める。彼らの実現した言葉のない演技についての批評や評価、マトレイの振付作品についての分析研究により検証していく。俳優エルンスト・マトレイは、ラインハルト門下の俳優の中でもあまり知られていない人物である。しかし 10 年代―30 年代に、彼は無言劇やバレエパントマイムの振付や演出に関わり、且つシェイクスピアやゲーテ、モリエールなど、ラインハルト演出の祝祭的な場面にも多く出演している。加えてサイレント映画に早くから出演し、30 年代以後は亡命先のハリウッドで映画製作に関わるなど「新しい舞台芸術」の重要な担い手の一人であったと考えられる。

② 劇作家のいない舞台創造への道程を探る。

無言劇という形式に関心を寄せた二人の作家フーゴー・ホールマンスタール(1874-1924)と、カール・フォルメラー(1878-1948)の台本製作を巡る書簡や記述の検証。彼らはゲオルゲ派の詩人として執筆活動を開始し、その後、ギリシャ悲劇の翻訳・翻案でラインハルト演出の洗礼を受け、次いで、中世道徳劇への関心から無言劇とバレエパントマイムへの台本提供など、多くの類似する方向性を持つ。いわば劇作家としての存在が希薄な「無言劇」「バレエパントマイム」などの台本を手がけることで、新たな舞台創造を志したといえる。そのため文学研究の領域では評価が困難な作家となってきた経緯もある。また、二人の比較の中江は、フォルメラーの作品に流れる「ポピュリズム」と「コスモポリタニズム」は、ホーフマンスタールよりもさらに進んだ形で無言劇『奇蹟』にも強く示され、本作で共に仕事をした俳優やスタッフの多くが、後にオペレッタや映画に才能を発揮していったことも興味深い。

③ 国際パントマイム協会（International- Pantomime Gesellschaft）の資料収集と調査。

1925 年にベルリンで設立されたこの「国際パントマイム協会」については、一般にはあまり知られておらず、詳細も分かっていない。ナチス台頭と共に分散したことで、短命であったとも考えられるが、本研究においては設立以前からの流れを追いながら、設立に至った経緯も含めて、調査を進める予定である。この協会の名を冠した客演公演では、マトレイ振付演出のバレエパントマイムやホーフマンスタールの『緑の笛』が上演されており重要な調査対象と考えている。

４．研究成果

コロナ禍の３年間、海外調査に出かけることが難しい状況ではあったが、過去に収集した資料の読み直しと分析を通して、助成期間中には以下の成果を得ることができた。また１年延長した最終年度にはベルリンへ資料調査にでかけ、新たな資料調査、および今後の研究の可能性についても確認することができた。

3 年間では各年の成果を論文としている。まず「ラインハルト劇団の振付とその越境性―国際パントマイム協会（1925）設立の背景」(『近現代演劇研究』Vol.9、2020 年 8 月)、そして「ラインハルトの『マクベス』(一九一六年）演出台本における非言語表現」(『文芸研究』143 号、2021 年 2 月)、「ラインハルト演出のアメリカ公演（二）―モスクワ芸術座の海外公演との対照」(『演劇学論叢』22 号、2023 年 3 月）である。

一つ目の論文では、研究計画にあげていたエルンスト・マトレイ(1891-1978)および「国際パントマイム協会」に関する調査から明らかになった演目やマトレイ自身の活動状況をもとに考察を進めたものである。二つ目の論文は、従来、「演出家」の演出意図が反映されたものとして扱われてきた「演出台本」について、演出家による戯曲の解釈として扱うのみならず、これまで申請者の問題意識としてきた協働製作としての総合芸術という視点から、劇作家の言葉、演出家の意図のみならず、協働した俳優や舞台美術家の関与を読み解く可能性のある上演テクストとして、捉え直すことを試みた。「演出台本」に記された「非言語表現」の特徴を詳細にみることで、演出家の意図のみならず、俳優の身体性や演技、美術や照明によって形成された舞台の全体像として再考したものである。三つ目の論文は、ラインハルト演出のアメリカ公演として知られる無言劇『奇蹟』と同じ時期に、アメリカ公演を行ったモスクワ芸術座を巡るさまざまな状況、演出が国境を越える別の事例として注目し、当時の状況を調査し、外国語上演がもたらす非言語表現、および「演出」の役割について再考した。舞台芸術の国際的な上演、つまり「演出」が国境を越える二つの異なる例として、すでに申請者が過去に調査を行った演目『奇蹟』における群衆演出と、モスクワ芸術座の演出におけるアンサンブルの効果など、言葉を越えた表現がいかにアメリカ公演において受容されていったのかを明らかにした。研究期間の延長最終年度には、申

請者は過去の研究を纏め博士論文「マックス・ラインハルトの協働による舞台創造―思考の集積としての「演出」の諸相―」で学位請求の準備を進めたが、そのいくつかの章を書き下ろし、かつ改稿するなかにも、たとえば 1910 年代のラインハルトによる群衆演出の中に、非言語表現への意識や重視の萌芽があることが確認され、また 1934 年にラインハルトが演出家として招聘され、イタリア人俳優やフタッフとの協働により、ヴァネチアで上演された野外スペクタクル『ヴェニスの商人』における非言語表現がもたらした演出効果や、その後、俳優やフタッフワークを介して受け継がれていった新たな舞台製作の様相などについても明らかにした。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計3件（うち査読付論文　2件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 大林のり子	４．巻 22
２．論文標題 ラインハルト演出のアメリカ公演（二）ーモスクワ芸術座の海外公演との対照	５．発行年 2023年
３．雑誌名 演劇学論叢	６．最初と最後の頁 61－82
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 大林のり子	４．巻 9
２．論文標題 ラインハルト劇団の振付とその越境性ー国際パントマイム協会（1925）設立の背景	５．発行年 2020年
３．雑誌名 近現代演劇研究	６．最初と最後の頁 2-18
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 大林のり子	４．巻 143
２．論文標題 ラインハルトの『マクベス』（一九一六年）演出台本における非言語表現	５．発行年 2021年
３．雑誌名 文芸研究	６．最初と最後の頁 105-129
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計0件

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関